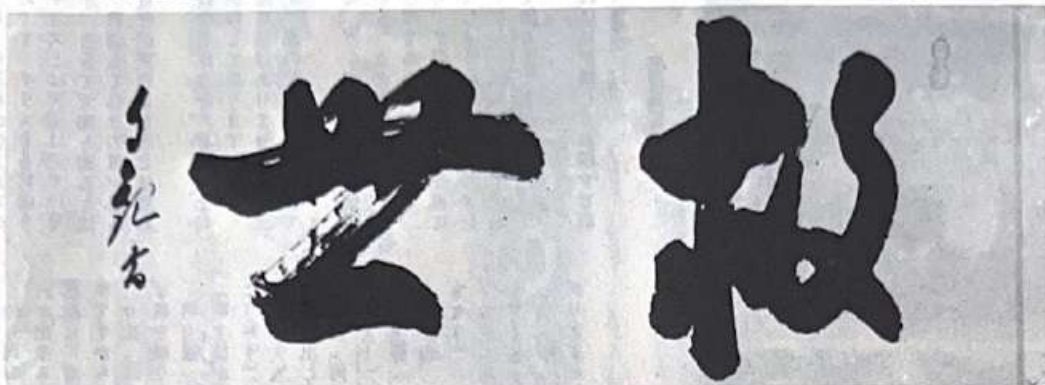


全人類への御救い

明主様とカルティユ氏(パリ・マッチ誌主筆)御対談



発行所
京都市左京区吉田神
楽岡町3
有限会社洛東社
郵便番号606
電話(711)2022番



明主様御真筆

前号(聖26)までは、

明主様が、本教について御論文或は御講話の形を通じて、多くの信徒若しくは世の中の大勢の方々を対象にお説き下された御救いのいくつかをお取次ぎさせて頂いてまいりました。今回は、ある個人との御対談の際、明主様の御救いについてお説き下さいました御救いの一部をお取次ぎさせて頂きたいと存じます。

明主様は、かつて色々な分野の方々と対談して下さい、その度にその時の状況に応じて夫々異った角度、御表現によって御救いの真髄をお説き下さいました。今回はそれらの中から、昭和二十七年六月二十二日に、フランスのパリ・マッチ誌の主筆レモン・カルティユ氏夫妻と御対談遊ばされた際の速記録(要旨)を抜粋してお取次ぎさせて頂きたいと存じます。御言葉の一つ一つを厳密に記録されたものではないようでありますが、その片鱗にはふれさせていただけではないかと思えます。

当日の御対談は終始和気藹々の中に、時折放たれる洒落に笑い声さえまじえ乍らおす、め頂いたとのことであります。最初カルティユ氏の御挨拶、紹介からはじめられ、同氏が美術に興味を持っていたことから先ず芸術のことにおふれ下されて居ります。

明主様は「私は宗教家ですが、今迄の難行苦行や、苦しみによって救うのではなくて、反対に楽しみに依って救おうという、そういう意味に於て宗教に芸術は最も必要だ」とお説き下さり、更に御救いの現状から今後の御目標・方法に至るまでお説き下さったのであります。

「私の狙いは世界なんです。(中略)私の狙うは世界の各国の人ですね。世界でも、兎に角文化の高い国から先に解らせ様と思う。そうすると、文化の低い国は自然に解りますからね」

カ氏「その希望をお達しになる迄に、何ういう方法を今お取りになりますのですか」

明主様「今、一番私の発展した動機は(中略)何んだという病気が治る事です」

カ氏「アメリカにも病気を癒す事が出来るお弟子さんがお有りになりますので」

明主様「あります」

カ氏「アメリカ人です」

明主様「アメリカ人にもあります」

カ氏「やっぱり、そのアメリカ人はこちらで治して戴いて」

明主様「そうです」

カ氏「病気を癒すという事は、神様があなたに授けて下さった御力で、それと」

明主様「神様です。神様が居て病気を治される。仮りに頭が痛いという処を私が斯う(御浄霊)やると治っちゃう」

カ氏「みんなお弟子さんにも……」

明主様「ですから、弟子に御守をあげます。御守を首にかけますと私の身体から御守に、霊線・光の繋がり、それは目

本教について(五) 会長 多田 光行

明主様の御救いについて

(その19)

に見えないが其人の身体から一種の光が出て、それで病気が治る。光を見る人は沢山あります」

カ氏「癒す御力というものがお有りになると同時に例えば頭を痛くする事も出来るようになります」

明主様「出来ません。之は何処迄も善ですから、痛めるのは悪です。苦痛ですからね。但し、痛みを取る為に一時痛む場合もあります。それは浄化作用です」

カ氏「何ういう修行を致しましたら御守を戴いて人を治せる様に」

明主様「修行は要らないです。只、三日とか五日、一教修という、話を聞く丈で御守をかけたら治るんです」

カ氏「神様のお告げという事に確信を持たなければならぬので」

明主様「持たなくても良いです。最初から疑っても良いんです。疑り抜いても

良いんです。最初から疑わないう事は、己を偽るんです。何んにも信じられないものを、信じろというのはいくらも嘘です。自力は無いんです。神様の御力を与えられるんです」

カ氏「それでは、あなたが之ならば大丈夫、斯ういう事が出来ると御判断なされば御守をいただけるので」

明主様「全然そんな事はないです」

カ氏「お告げを何ういう形でお受けになられたのでしょうか」

明主様「お告げなんて面倒な事は要らないです。神様が何かやろうという事は直接私に分りますからね」

カ氏「形もなしで」

明主様「私が感じますね」

明主様は御自身が「神人合」であられ、そして地上天国を建設される直接の担当

者であられることをお説き下さって居ります。

「私は世界中の病人を無くするんです。世界から病気を無くするんです。病気を無くするということは、悪人というのはいくらも病人なんです。悪人が無くなるから宗教の必要がなくなるんです。(中略)というの、病気の原因があるんです。それが今迄は人類は、病気の原因というものを間違っていた。ですから私が、その原因を明かしますからね。私はそこで今本を書いています、之を世界中に配ります」

カ氏「病気というものが無くなります」という事になりますと、死というものが非常に遠いものになっていきますので

明主様「そうです。人間はみんな百歳

以上生きるんです」

更に、明主様の御救いの御力についてお説き下さって居ります。

「私の弟子でキリスト位の奇蹟を現わすのは沢山あります。ですから私のメシヤ教は宗教じゃないんです。宗教では人類を救えないんです。只、宗教は私が出た人達が教えられる程度のつなぎであつたんです」

カ氏「 Bibelなんかキリストが、死んで三日目に蘇生させた」とあり、信者は固く之を信じてますがカトリック信者にそう言わせる様にするには、やっぱり信者の人を蘇生させる様な事を目に見せてやらないと信じないですが、そういう様な事が出来るので」

明主様「私の弟子で立派に出来ます。弟子で、一旦死んだ人が生き返る様な事をやります。ですから、あなた方でも私の弟子になれば、キリスト位の事は出来ますよ」

カ氏「言換えてみれば、兎に角死亡した者を再び生返す御力がお有りになるという事で」

明主様「そうです」
カ氏「お弟子さんでも」
明主様「出来ません」
カ氏「キリストの様に、食物が無くなくと食物を与えるとか、土地をもっと豊富にするという御力は」
明主様「出来ません。そういう事は沢山あります」
カ氏「私としては是非全世界に弘まる事を非常に希望しますが」
明主様「無論そうなります。それからカトリック信者が今メシヤ教信者になります。それは誰がそうするかという、キリストがそうするんです。キリストの霊がみんなメシヤ教の信者になる様にします」
カ氏「カトリック信者が必ずそういう風になるという事は、何かお告げが何かで御存知なもので」
明主様「そうではない。私が何もそんなに働きかけなくても、先方何うしても私に働きかけなければならぬ様にキ

以下 2面へ続く

たしそ

おかげ話

10年余の悪質
な湿疹に悩む

このたびは大へんな御尊顔をい
ただ伺しましたとを御報告申し上
げます。

なでも少しも憶ると云ではな
りません。

今度は暫くから副作用が出初
めたりが御用を定見、また玉因

薬の後遺症で眠れぬ毎夜
3月で仕事にも就く

信靈入淨

小 西 孫 一

[illegible]

れい、めい、俳壇

丸山海道選

◆二月選句◆

初編は、この空に止めて来し
雨夜して初巻準備に足りし朝
突き放す貨車の余力で風花す
白米の火屑が、とれぬ電車む
外間の女子の背文を仰ぎ見し
春もぬる髪質の砂利の音
網の裏一つをほめてお正玉
庭子登る山崎より神隠し
二月は赤字話の切羽りも
電車待ちたかば唇息思ひく
社の袖つばみ朝の希望なく
顔上げて木村のやう多の底
水仙の端麗所へ出た庭花壇
神前のお豊の香雪の誘へる
網女の宣紅の一書しか獲る
網女の便りに心ち比肩へ
門間田歩赤子の持つ紙の糸
上の句にとれはあがゆさ教習多会
姉妹へきりとり願ふ愛の菊
怪かめる子の王様風の恵かて
控らぬ雪の有難さを懐ひ
君親の時を聴いて七土が砂
友はちんねづつももの上縁に
早朝の手洗水すずみとおど
首床の準備小窓子をも使ひ
一児背に一斗を引き冬の暮
教習多会目の肥であられせず
床に眠く夢の影の赤と白
公の家と社下をゆく初知念
早く七日年間のめんどに泣けむ
舟乗り梅屋敷の二人旅ひ
運賃の値といふ期に船行く意を
運賃友ははなればはなと驚くへ
無つきのなりき声響へ井戸を
霞月の光を生ける閑の月夜を
霞月の光を足踏するといひ
初知念にあらずともめんとすなく
隙間にゆく後援の金銭談
隙間にゆく身のかたてへ離じたり
冬山へ静寂を鳴らすハル
冬山へ静寂を鳴らすハル

多田 照江
田原 幸治
森本 劉子
川中 鳳麟
川中 新一
郡司馬 肇
岡本 弘
加畑 富子
渡邊 大純
上田 修一
丸田 昌子
磯野 初枝
大嶋 光昭
桑田 光雄
桑田 政司
長沢 光雄
藤田 保
黒野興也子
長瀬 正明
小林加代子
廣田 亨
藤田 孝
山田 健代
西野島貞子
三浦 三郎

◇…三月遷宮…◇

朝顔は江戸に光る万商の葉
 床のあいつしか雪のちつきて
 あかぬけの手をはたて床に入る
 遠くで四國の友の初便り
 初陽半浴の水面に集まて
 北風を押されて歩み過り
 雲を我物風の鳥羽
 花をまづれしなせぬ子ら就きて
 羽子坂の縁のなかりき起さな日を
 合點思ひ切らし投げる赤く
 白の花の間に舞を踊み出る
 花を赤く想いをめて毛糸纏む
 ◇三月選句◇
 花をまづれしなせぬ子ら就きて
 羽子坂の縁のなかりき起さな日を
 合點思ひ切らし投げる赤く
 白の花の間に舞を踊み出る
 花を赤く想いをめて毛糸纏む
 ◇三月選句◇
 花をまづれしなせぬ子ら就きて
 羽子坂の縁のなかりき起さな日を
 合點思ひ切らし投げる赤く
 白の花の間に舞を踊み出る
 花を赤く想いをめて毛糸纏む

高橋 裕子	長谷川知子	山田 薫	西村 直美	田原 幸治	川中 風鏡	森本 彌子	石原 道子	岡本 弘	川中 新二	加畑 喜子	隆盛一太郎	上田 修一	森田 光雄	郡司島 繁	小林加代子	大嶋 浩昭	長谷川 正明	大橋 正志	田田 亨	黒野 亮子	長谷川 知子
長谷川知子	山田 薫	西村 直美	田原 幸治	川中 風鏡	森本 彌子	石原 道子	岡本 弘	川中 新二	加畑 喜子	隆盛一太郎	上田 修一	森田 光雄	郡司島 繁	小林加代子	大嶋 浩昭	長谷川 正明	大橋 正志	田田 亨	黒野 亮子	長谷川 知子	

◆…四月選句…◆

雪は日の淡き光の石畳
風の中に入試発表待てる群
親友の饒舌の聲は地をかねて
亜細亜の運動のふりつゝ
梅の花朝先鞭にゆふらみて
春に暮る夢ふくらむと虚作
るの声に聞かざれ時忘る
暮時朗吟く逢はぬ雨やど
夢空に相対し眼の裏へ行く子
受驗期の札のわらひに心な
雪解けてすきキラ光る船がち
阿婆の靴ニシンの音ひびく
青春し顔舞う手に街角
幼子の手を喜ぶの涙く得け
はやく手に雪当てられ逃げる母
春の閑寂くるて色淡し
春の閑寂くるて色淡し
ひと形なきとき聞けまねで
ゴロ船はほは赤く歌うたあらず
得たばかり豆まき手らはやきて
花散る庭園からんやふかに
うそといひながらの花袂く根
花散り出す冬の夕路草

◆四月還句◆
隠は露水おひて苔なし
人来てこゝは風の悔みさ
新遊と思ひ出多き春の可
庶なる芽めあるよ友の社に
折のゆくを寄馬屋く
厄にあたりある路地会釈七
夜の千一人懸國の国に住る
解の休の舟より手紙つ
よげ開いた土手車轆む
はり風に出かく車轆子
この春こそカサの傘し
林は遠くに望み足はむ
花知らぬ小橋に鳴る
時節を心に知る風車の光る
雨の音を心に知る風車の光る
上田小夜子
磯野初枝
岡本弘
上田修一
窪田大龍
大島元照

高橋 樹子
尾川 三郎
長谷川知子
星野 治代
長谷川万佐江
長森由美子
長良 光敏
小林 正幸
西村 直美
山田 薫
高橋 順子
折井 美都
多田 昭江
田原 幸治
川中 風範
藤本 潤子
川中 新一
石原 潤子
加畑 淳子
上田小夜子
磯野 初枝
岡本 弘
上田 修一
窪田 大龍
大島 元照

◆…五月選句…◆

[illegible]